



## アルツハイマー病は

### 事例紹介

#### 記憶力の低下と異常な行動が始まり…

Cさんは51歳の女性で専業主婦です。ある年の3月、「夫が隣の家の女性と散歩に出かけた」と言い出しました。これが、夫が異常に気づいた最初の出来事です。記憶力が低下し、食事の用意がきちんとできなくなり、徘徊することもありました。だんだんと、他の家事もおろそかになるとともに、朝方、興奮状態で、近所の家々のベルを鳴らすようになりました。また、物を隠すようにもなったため、夫に付き添われて病院を受診し、検査のため入院しました。



実は、これは今から約100年前の患者さんの話です。病名のもとになった、アロイス・アルツハイマー博士が診た最初のアルツハイマー病の患者さんです。

このように、アルツハイマー病は記憶が薄れていくのが主な症状で、いわゆる物忘れが起こります。記憶の低下以外にも、判断力が悪くなり、物事の段取りがうまくいかない、日付や時間、自分がいる場所や、部屋の間取りがわからないなどの見当識障害、言葉が出てこないの「あれ」「それ」などの代名詞が増える、お金の計算ができないなど様々な症状が現れます。



このような症状がいつの間にか始まり、少しずつ進行していきます。しかし、初期であれば、手足の麻痺や、ろれつが回らない、手が震えるなど、他の認知症の原因疾患で見られるような体の症状は見られません。

ですから、家族や周りの人が本人の変化に気づきにくく、本人も不調を感じることや、仕事にミスが出たりすることはあっても、アルツハイマー病であるとは考えもしません。まずは、これまでとは違うことに早く気づくことが大切です。



## どんな病気ですか？

### アルツハイマー病への対応

アルツハイマー病では、治療とともに、家族の対応が本人の気分や症状に大きな影響を及ぼします。

物忘れなどの主な症状に対しては、薬が使われますが、認知症の行動・心理症状といわれる、それ以外の様々な症状に対しては、家族や周りの人の対応や、暮らしの環境、身体疾患の有無などが大きく影響するとされています。

たとえば、アルツハイマー病では「取り繕い」といわれる症状が見られます。何か質問されて答えられない場合に、事実ではないことをうまく取り繕って返事をする場合があります。聞かれたことに「知らない」とは言いたくない、あるいは、相手によく思われたいといった心理状態の表れかもしれません。このような場合に、家族が「それは間違っているでしょう」という反応をすると、本人は理解ができず、非難されたという不快感だけが印象付けられます。しかし、本人に合わせて「そうだね」と共感することで、気持ちを落ち着かせることができます。

アルツハイマー病では、アリセプトという1種類の薬が長く使われてきましたが、平成23年の春からは、これに加えてさらに3種類の薬が使えるようになりました(43ページ)。これらの薬は、病気の進行を緩やかにするものですから、なるべく軽いうちに治療を始めるのが理想的です。

早く気づいて、早く治療を始めれば、進行を遅らせることができ、日常生活もしやすくなります。また、将来のことや財産管理など、家庭内の重要なことを家族と話し合ったり、決めたりすることもできます。本人だけでなく、家族にとっても、早期発見・早期治療は、メリットがあります。





## 血管性認知症は

### 事例紹介

#### エリート営業マンのDさん、突然倒れて…

Dさん(男性)は41歳、機械会社に勤務するやり手の営業マンで、40歳前の若さで支店長に抜擢されました。ある冬の夜、右半身マヒ、意識もうろう状態で倒れているのを発見され、入院しました。くも膜下出血でした。手術で命は取り留めましたが、脳梗塞を併発し、記憶や判断、計算能力の障害が加わりました。リハビリにより、手足の麻痺は、身の回りの動作ができるほどまで回復しました。

Dさんは独身で、家族がいません。入院していることが理解できず、明日にも仕事に復帰できると思っています。しかし、集中力、記憶力が低下し、判断力も十分でなく、書類1枚満足には書けない状態です。

会社の社長は好意的で、復帰の道を探ってくれました。しかし、管理職であった人に単純労働をさせられない、名誉職にするには若すぎるなどの理由でうまくいきません。とりあえず、社会復帰を目指せる別の病院に転院することになりました。



血管性認知症は、脳梗塞、脳出血など、脳卒中が原因で起こる認知症です。

若年性認知症の原因疾患の中では最も多く、約40%とされます。

脳卒中の原因のうち、脳出血とくも膜下出血を合わせると、約55%となります。

血管性認知症では、脳血管障害の再発予防が最も大切です。糖尿病、高血圧症、高脂血症など、生活習慣病にならないよう予防すること、すでにかかっている場合は、それらの治療も必要です。



## どんな病気ですか？

### 血管性認知症への対応

手足の麻痺やしゅべりにくいなどの症状がある場合は、適切な環境でリハビリテーションを行います。日常生活でも、転倒しないよう注意をします。

アルツハイマー病と比べて、血管性認知症では言葉がしゃべりにくい反面、人格は保たれており、相手の話は理解できるので、何気ない言葉が、本人を傷つける場合があります。そうすると本人のプライドに傷がつき、介護者との間に溝ができてしまうことになります。本人の人格を尊重して、ていねいに対応することが大切です。



本人の人格を尊重し、ていねいに対応